

国際会議参加報告

第35回国際軍事史学会大会の概要

立川 京一

8月30日(日)から9月4日(金)にかけて、ポルトガル共和国ポルト市において2009年軍事史国際会議(Congress of the International Commission of Military History)が開催された。同会議は今回で35回目となる。会場は、大航海時代から税関として使用されていた歴史的建造物を会議場に改装した「アルファンデガ会議センター」であった。

今回の会議には40カ国から約330人の参加者が集った。日本からは、小官のほか、高橋久志・上智大学教授、源田孝・航空自衛隊幹部学校戦史教官室教官が参加した。アジアからは日本のほか、中国から6人、韓国から2人、インドネシアから2人が参加していた。

本会議の共通テーマは「ナポレオン時代の戦争—前史、戦役、そして長期的影響—」であった。本年が、ポルトガルがナポレオン率いるフランス軍に2度目の進攻を受けた1809年から数えて200年目に当たることから設定されたテーマである。研究発表等は、正規の参加者による研究発表が83本、開会時と閉会時に講演が1本ずつ、主としてポルトガルの大学院生による研究発表が6本の合計91本なされた。これらの研究発表等のほか、ナポレオン時代に関する近刊書を取り上げて議論するブック・パネル、ポルトガル及びポルト市が所蔵する戦史史料等を紹介するワークショップ、そして、ナポレオン軍によるポルトガル進攻に関するラウンド・テーブルが実施された。このように、研究発表等は非常に数が多く、常時、2乃至3のセッション等が同時並行で実施された。

これらの研究発表を聞いて、ナポレオン戦争が英仏独墺露といったヨーロッパの大国だけでなく、ヨーロッパの周辺地域、南北アフリカ、中近東、南北アメリカ、東南アジアといった非常に広い地域に影響を及ぼしたことを認識した。特に、当時はオランダの植民地であった現在の南アフリカがナポレオンに征服されたことにより英国の影響力浸透の契機となり、ボーア戦争につながる状況がもたらされたことについての発表は刺激的であった。

なお、小官の研究発表「日本におけるナポレオンの人気と理解」は、会議最終日の9月4日(金)午前中の最終セッションで実施した。軍事史国際会議での研究発表は、多数の外国人研究者を対象に、外国語で自らの研究成果を発表することができる貴重な機会であり、研究能力・発表能力の向上をはかると同時に、外国の研究者に対して情報を発信できる機会でもある。また、研究発表を行うと、それを聞いた参加者から質問、意見、感想等を受けるようになるため、交流のきっかけとしても重要であるとの感を持った。

(防衛研究所企画室研究調整官兼戦史部第1研究室主任研究官)